

論点

スポーツ界にも法令順守教育



武藤 芳照氏
東京大学名誉教授。東京健康リハビリテーション総合研究所所長。スポーツ・コンプライアンス教育振興機構代表理事。68歳。

東京五輪・パラリンピックまであと1年を切った。ラグビーワールドカップも間もなく始まる。全国各地では、様々なスポーツの大会が繰り広げられている。スポーツは、心身の健全な成長や発達を促し、仲間との出会いを生み、人生を豊かにしてくれる文化だ。誰もが「スポーツを通じ幸福で豊かな生活を営むことができる」と、スポーツ基

本法にもうたわれるなど、現代社会においてスポーツの重要性は、広く認識されるようになった。そんなスポーツを根底で支えているのは、ルールとフェアプレー精神を守り、勝敗にかかわらず他者を尊

重する基本姿勢である。ところが近年はスポーツ界で、体罰や不正行為、違法薬物問題など、こうしたスポーツの価値を損ない、信頼を失わせ、スポーツの社会的な存在意義を危うくするような事例が後を絶たな

い。国際オリンピック委員会は、2014年に打ち出した五輪改革「アジェンダ2020」の中で、社会規範にのっとり公正に物事を行うことを意味する「コンプライアンス（法令順守）」をうたっている。6月にスポーツ庁が策定した「スポーツ団体ガバナンス・コード」でも、コンプライアンスの重要性が示された。過去、日本のスポーツの現場では、「スポ根」（ス

ポーツ+根性）の言葉に象徴される時代があった。精神論を理由に強いるような指導からは、スポーツ障害や事故も生まれた。現在は「スポ根」の言葉そのものが現場で通じなくなっているが、その考え方は一部で今なお伝承され、不祥事を引き起こすコンプライアンス違反の温床にもなっているように思う。

医療では「予防に勝る治療はない」と言うが、スポーツでもそれは共通している。コンプライアンス違反の事例や不祥事を、予防し減らすことが重要であり、その具体的な手段としては教育が最も有効と考える。例えば、スポーツの価値と力を知り、それを象徴する実話や言葉を学ぶ。不祥事・事件の背景や原因を探り、スポーツの大切さを考える。万一問題が発生した時には、「遅れず、隠さず、ごまかさず」を基本に、迅速かつ真摯に対応することの重要性を知る。

私が代表理事を務め、コンプライアンス教育を通じてスポーツの普及・振興を目的としている「スポーツ・コンプライアンス教育振興機構」は、このほど「まんながでわかる みんなのスポーツ・コンプライアンス入門」（学研プラス）を発刊した。スポーツ・コンプライアンスという、一見難しそうに思えるものを、現代の「スポコン」としてやさしく面白く伝えようと、漫画を用い、スポーツ界の逸話を紹介し、選手からのフェアプレー精神に関わるメッセージを盛り込んでいる。

スポーツコンプライアンス普及に尽力 **武藤 芳照**さん(69)

東京大教育学部教授などを経て、東京健康リハビリテーション総合研究所(東京都文京区)の所長を務める。健康増進、予防医学に取り組みながら、スポーツ・コンプライアンス(法令順守)の普及に努める。

愛知県大府市出身。名古屋大医学部に進み、整形外科医に。中学から大学まで水泳部で主将を務めた。高校時代の水泳指導者に受けた影響からスポーツ医学の道に。

都内の病院で勤務医を務め

た後、東大に移り学者生活に。ロサンゼルス、ソウル、パルセロナ各五輪で水泳チームのチームドクターを務めた。

一昨年からはスポーツ・コンプライアンス教育振興機構(港区)の代表理事に。プロ・アマ問わずスポーツ界で反コンプライアンス行為が激増。昨夏には若者向けに漫画を使ったコンプライアンスの解説書を作成した。「スポーツの価値が損なわれる」と危機感を隠さない。「昨今の政治家の倫理がスポーツ界に影

この人



を落としていないか」とも。ドーピング問題にも詳しい。「不必要な薬物を長期間体内に入れるのは健康上問題。動機も経済面や名誉欲に駆られている」(加藤行平)

2020.2.13